

【原著】

コロナ禍におけるリモートインターンシップの事例報告

——17大学・15企業による連携事例への参加を通して——

小 原 寿 美

A Case Study on a Remote Internship Program during the COVID-19 Pandemic:
Involving Collaborations between 17 Universities and 15 Companies

Hisami Kohara

1 研究の背景と目的

2019年12月に中国湖北省武漢で確認された COVID-19（以下、新型コロナウイルス）は、2020年1月には日本国内でも感染者が発生し、以後感染者の報告が相次いでいる。そのため、2020年度は4月から5月にかけて緊急事態宣言が発出され、社会活動が抑制された。企業の採用活動についても同様で、例年3月期に開催されている合同企業説明会の多くが中止となった。また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて企業の業績が悪化したことなどにより、採用活動自体も鈍化していることが各種報道により明らかになっている（内閣府：2020）。

大学においても、2020年度は対面授業による新型コロナウイルス感染を回避するために積極的に非対面授業が行われた。また、前期から夏期休暇時期においては対面で行わなければならない演習や実習は中止や延期を余儀なくされた。大学側の状況に加えて、感染防止の観点から企業がインターンシップ受け入れをしないことを決めたため、受け入れ先を必要数確保できないこと等により、学生を送り出したいと考えている多くの大学が、本意ながらインターンシップを中止せざるを得ない状況となった。

しかしながらこうした状況下においても、Zoom¹などを用いた非対面形式での企業説明会やインターンシップなど新たな取り組みが行われるようになった。採用活動も、オンライン面接に切り替える企業が出るなど、非対面で行われる活動が活発化してきた。

広島文教大学（以下：本学）では、2020年度のインターンシップについて、5月末に運営が決定された。小原（2018, 2020）などで示されている通り、これまでも本学では夏期休暇中に対面による企業内でのインターンシップが行われてきた。しかし、2020年度は新型コロナウイルスの影響で、インターンシップ受け入れそのものの中止や延期、日数短縮などが結果的に起こり、学生も大学側も実習先の確保が容易ではなかった。このような中、本学でも完全非対面によるオンライン上で行うインターンシップ（以下、リモートインターンシップ）に参加することができた。対面でのインターンシップが十分に行えない社会状況下で、このような状況にあるからこそ、非対面で行うリモートインターンシップを行うこと、および実践から得られた知見をもとに内容の検討と振り返りを行うことが必要である。また、準備から実践、振り返り

1 Zoom とは、パソコンや iPad などから Web 会議を実現するクラウドサービスである。複数人での同時参加が可能なビデオ会議アプリケーションである。

という一連の流れに中でどのような学びや気づきが見られるかを精査することで、今後のインターンシップやキャリア教育、キャリア支援への知見を得ることができる可能性がある。

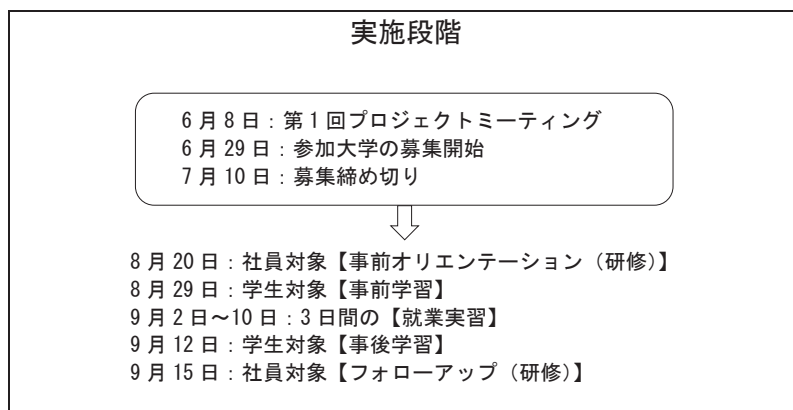
そこで本稿では、一般社団法人産学協働人材育成コンソーシアム（以下：CIAC）主催で2020年8月下旬から9月中旬にかけて開催された、17大学・15企業の連携協働により行われた5日間のリモートインターンシップ（以下、連携協働リモートインターンシップ）について、特に参加大学の立場からその具体的な内容を報告し、リモートインターンシップの可能性や参加大学側の課題について検討する。

2 連携協働リモートインターンシップの概要

2.1 開催までの流れ

連携協働リモートインターンシップは、まず2020年6月に初回のプロジェクトミーティングが開催された。本稿ではこのプロジェクトミーティングの状況から、企画確定後の連携協働リモートインターンシップ参加について、大学教員のかかわりと3名の学生の実習状況について詳述し、連携協働リモートインターンシップの概要について整理する。

図1は、連携協働リモートインターンシップの実施プロセスである。事前準備段階から事前研修、就業実習、事後研修の一連のプロセスで行われた。以下の各節で実施段階ごとの具体的な内容を示す。



出所）CIAC（2020）実習準備資料より抜粋

図1 リモートインターンシップの実施概要

2.2 基本方針とねらい

2020年6月8日、CIAC 講師の呼びかけにより、CIAC 認定インターンシップコーディネーターが数名、オンライン上で集合した。CIAC 認定インターンシップコーディネーターとは、教育的効果の高いインターンシップを実施するためのインターンシッププログラムの構築・運営や、大学・企業間の調整を担うインターンシップの専門人材である（松高：2020）。近年、教育的効果の高いインターンシップを実施するには、インターンシップ専門人材が不可欠であるとされている（文部科学省：2018）。そのため、2018年からCIACは、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）と連携して「インターンシップ専門人材セミナー」等を行い、当該専門人材の

育成を行っている²。今回、プロジェクトミーティングでは上記セミナー講師およびセミナー等を受け認定されたインターンシップコーディネーターが数名集まり、講師主導のもとにまずインターンシップの現状把握がなされ、その後、企画の方向性が練られた。

プロジェクトミーティングではまず、各参加者により勤務校や近隣校のインターンシップ状況が報告された。いくつもの大学で対面によるインターンシップは中止を余儀なくされたこと、日数短縮や学内開催での単位認定などの規模縮小などの事例が報告された。6月時点では多くの大学で夏期休業中に運営されているインターンシップが行われるかどうかも明確ではなかった。どの大学も、新型コロナウイルスの影響により、インターンシップをどのような形で行うのが適切か、手探り状態であった。

そのような中、インターネット上では、オンラインでの企業説明会や採用面接が増加しており、オンラインで行われるインターンシップも少しずつ出てきていることが示された。しかし、内容を見ると、インターンシップと称した1日のみの企業説明会やそれに類するものが散見されるのみで、文部科学省が謳う教育的効果の高いインターンシップと言えるインターンシップであるかどうか、また具体的にどのような内容のものがどのように運営されているのかは明確ではなかった。

そのため、講師陣からの提案により、2020年夏期を実習時期として、複数大学・複数企業参加によるリモートインターンシップが企画された。先述した通り、本稿ではこのインターンシップを連携協働リモートインターンシップと称す。連携協働リモートインターンシップは、学生のため、大学のために不完全であっても今後のリモートインターンシップの一つのモデル（検討材料）となるようなインターンシップを運営する、ということを念頭に置き企画が立てられた。

プロジェクトミーティングを経て決定された事項は以下の通りである。

- ・1大学あたりの参加者は5名程度
- ・参加企業1社と共に参加すること
- ・自大学の学生、企業については、当該大学が責任を持って対応すること
- ・教職員は全プログラムに参加し、フィードバック等の役割を担うこと
- ・大学としての（組織としての正式な）参加でなくて構わない、正課・正課外も問わない

また、準備にあたって決定された基本方針は以下のようなものである。

- ・企業と大学が、協働して実施する教育プログラムであること（結果として採用につながることは構わない）
- ・企業（社員）、大学（学生）、それぞれにメリットをもたらすこと
- ・インターンシップとして重要なキャリア教育（キャリア形成）の要素を含んでいること
- ・リモートであることのメリットを最大限に活かすこと
- ・「インターンシップコーディネーター」が関わることで、最大限の教育的効果をもたらすこと

2 文部科学省（2018）では、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が実施する「インターンシップ専門人材セミナー」等により、当該専門人材の育成・配置を推進することを明記し、専門人材育成の必要性を謳っている。同資料の中でも、教育的効果の高いインターンシップを実施するには、プログラムの構築・運営や、大学・企業間の調整を担うインターンシップ専門人材が不可欠であるとされている。

以上のような基本的な事項が決定されたのち、次節以降で示す事前準備が行われた。

2.3 事前準備（6月から8月）

6月29日に、CIAC 認定インターンシップコーディネーターに情報が共有され、参加大学の募集が開始された。7月10日の募集締め切りまでに、17大学（61名の学生）、15企業の参加が決定した。参加大学・企業とも北は北海道から南は九州まで、広範囲にわたっていた。また、多くの参加大学・企業が初顔合わせとなる状況であった。参加大学関係者も学生、企業担当者もすべてのプロセスを完全に非対面（リモート）で行った。

この連携協働リモートインターンシップに、本学も17大学の一つとして参加した³。このような複数大学・複数企業参加によるリモートインターンシップの取り組みは国内で初めてとされる（日経キャリア教育キャリアエデュ：2020）。

参加大学決定後、学生、社員、企業、大学それぞれに対するねらいとして、以下の点が講師から示された。まず学生に対するねらいは、以下の通りである。

- ・「リモートワーク」という働き方を体験的に理解し、自らの働き方を吟味する
- ・他大学の学生と接することで、価値観、視野、選択肢を広げる
- ・所属大学では得られない企業、業種での経験が得られる
- ・進路選択の土台となる生き方、働き方について考える

次に、社員に対するねらいは以下の通りである。

- ・今後のキャリアを形成するための生き方、働き方について考える
- ・自社、自身の業務を客観的にとらえる（メタ認知）
- ・リモートによるコミュニケーションのポイントを理解する
- ・リモートによる課題遂行のポイントを理解する

続いて、企業に対するねらいは以下の通りである。

- ・これまで接することのなかった属性の学生と接することができる
- ・大学と協働することで新たなプログラムを構築、改善するヒントを得られる
- ・社員研修の要素が含まれるため、人材育成につながる
- ・大学教職員から本音でのフィードバックが得られる

3 参加大学は、以下の通りである。「東北福祉大学、北翔大学、鶴見大学、大手前大学、尾道市立大学、下関市立大学、デジタルハリウッド大学、愛知みずほ大学、京都産業大学、山野美容芸術短期大学、東北学院大学、埼玉女子短期大学、新潟大学、広島文教大学、湘北短期大学、横浜市立大学、福岡工業大学」参加企業は、以下の通りである。「株式会社ハミングバード・インターナショナル、株式会社マツオ、株式会社エイジェック、株式会社アイテム、株式会社キャステム、株式会社松岡、株式会社ティ・ジョイ、株式会社美里花き流通グループ、ワタキューセイモア株式会社、株式会社八芳園、株式会社 WAO STYLE、株式会社スティーブアスタリスク、株式会社ストライプインターナショナル、株式会社ホクエツ信越、リコージャパン株式会社」

最後に、大学に対するねらいは以下の通りである。

- ・学生にインターンシップ参加の機会を提供できる
- ・今後の新たなプログラム構築のヒントを得られる
- ・これまで接することがなかった企業との接点ができる
- ・他大学とのネットワークが広がる

以上のような基本方針およびねらいを掲げて、実習準備が進められた。また、参加にあたっては、以下のようなリモートインターンシップ特有の準備についても決定され、事前に参加大学等に通知された。

- ・Zoomを使用するため事前に基本的な操作ができるようになっておくこと
- ・パソコンをメイン機材として使用し、スマートフォンやipadはサブ機材としてのみ用いること
- ・情報のやり取りをスムーズに行い、かつ相互のコミュニケーションを活発化するため、ビジネスコミュニケーションツールとしてSlack⁴を活用するため、事前に基本的な操作ができるようになっておくこと
- ・すべての実習プロセスをリモートで行うことから、Wi-Fi環境の整った個室で実習を行うこと
- ・カメラ・マイクをオンにして実習を行う形が中心となるため、背景等に留意すること
- ・SNSに企業情報や個人情報を出させないなど、節度と配慮を持って実習に臨むこと
- ・事前に守秘義務等に関する連携協働リモートインターンシップ独自の誓約書を作成し、遵守すること

こうしてまず、参加する17大学が決定され、連携協働インターンシップの概要およびねらい等が参加大学の担当者に示された。次いで実習の概要をふまえた17大学のインターンシップコーディネーターからの声かけにより、関連する15企業の参加が決定された⁵。

2.4 事前研修（8月）

リモートインターンシップに限らず、対面で行うインターンシップが開催される場合にも、学生に対し、実習効果を高めること、ビジネスマナーを身に付けることなどを目的として実習前のガイダンスや事前研修が行われる。本学でも2020年度のインターンシッププログラム運営が決定されて以降、事前ガイダンスやビジネスマナー研修等が行われた。本学で連携協働リモートインターンシップ参加予定の学生3名は、これらの本学の一般的なインターンシップ事前準備に加えて、連携協働リモートインターンシップ独自の事前準備、事前研修にも参加した。

連携協働リモートインターンシップではまず、8月20日に社員研修（事前オリエンテーション）が行われた。続いて、8月29日に学生を対象とした事前研修（表1参照）が行われた。8

4 Slackとは、アメリカのSlack Technology社が開発し運営しているビジネスコミュニケーションツールである。

5 17大学のうち、本学を含めた2大学は、企業参加が叶わなかった。要因は、準備期間の不足等によるものである。

月20日の社員研修では、他社の社員とのグループワークを中心として、参加理由・目的、就業実習中の課題概要、目的、ねらい、学生への企業説明の現状と認識などを共有した。また、以下の点について学生が納得するように説明する時間を設け、社員も自分自身のキャリアについて深く考える時間が設けられた。項目は、「あなたにとって働くとは何か」「あなたにとって仕事とは何か」「with コロナの社会において、自身の今後のキャリアビジョン（どのような職業人生を歩んでいこうと考えているのか）」の3点であった。

8月29日の学生の事前研修では、他大学の学生とのグループワークを中心に、表1のような流れで事前研修が進められた。まず、以下の点について全体共有がなされた。項目としては、「連携協働リモートインターンシップの目的・目標の共有」「with コロナ社会の生き方・働き方」「リモートワークの意識・態度・マナー」「自己紹介動画作成」などであった。「連携協働リモートインターンシップの目的・目標の共有」については、各学生が事前課題としてシートに自分の考えをまとめてSlack上に掲載し、企業関係者および大学関係者はすべての学生の提出資料が確認できるように設定され、情報共有の促進が図られた。

自己紹介動画作成については、映像系に強みを持つ参加大学講師により具体的な方法および作成の留意点が示された。学生は期限内に各自のスマートフォンなどを使用して自己紹介動画を作成し、Slackに動画を掲載しておくという課題が課された。連携協働リモートインターンシップではこのような現代的な課題がいくつも出された。Slack内には企業が作成した動画も掲載されていた。参加学生は全員が自己紹介動画を作成し、学生同士はもちろんのこと、企業関係者、大学関係者もメンバーであればだれでも掲載されている動画やSlack内の情報にアクセスできるよう、オンライン上の空間が構築されていた。このSlack上では自己紹介動画の掲載のみでなく、作成した課題や関係者への質問、コメント等もやりとりできることが学生および関係者で共有され、以後連携協働リモートインターンシップ期間中はメンバー同士のコミュニケーションツールとして活発に使用されることとなった。また、事前研修から事後研修まで、グループワークはZoomのブレイクアウトルーム機能を活用した。

連携協働リモートインターンシップに参加することが決定した段階で、多くの大学が大学独自の事前研修を行い、学生のリモートインターンシップ参加を下支えしていた。本学の事例で述べると、参加学生は3名ともZoom使用の経験がなかったため、各自のパソコンへのソフトのダウンロードを促し、基本的な操作について、3名の学生を対象としてオンライン研修を行った。また、実習に必要な環境が個人で整えられない学生については、大学内の教室、パソコンを使用し事前に就業のための環境を整えるなど、昨今行われている在宅勤務さながらの準備を行った。また、Slackについても、事前に基本的な操作ができるようにするために使用のガイダンスを行い、実際に使用してみることで学生のスキルを上げることができるよう学生・教員間での使用も試みた。そのほか、大学の授業ではカメラ・マイクをオンにすることは少ないが、リモートインターンシップでは基本的にカメラもマイクもオンにすることになるため、背景の調整や音量、明るさの調整などについても事前に確認した。また連携協働リモートインターンシップの学内事前準備は意図的に全てオンラインで行い、Zoom、Slack、メール等でのコミュニケーションに事前に慣れることができるよう配慮した。

さらに、SNSに企業情報や個人情報を出させないなど、節度と配慮を持って実習に臨むことや、連携協働リモートインターンシップに参加した企業が最も心配をしている点が情報流出などのセキュリティー面に関する点であることなども参加学生に周知した。

コロナ禍におけるリモートインターンシップの事例報告

表1 学生の事前研修実施概要

| 時間 | 分 | 内容 | 形態 | 備考 |
|-----------------|-----|---|-------------|------------------------------------|
| 9:30～ 10:00 | 30分 | 学生は9:45には Zoom へアクセスし、大学・名前の表示、画面確認（実習中は画面 ON）。 | 全体 | |
| 10:00～ 10:10 | 10分 | オープニング 趣旨説明 | 全体 | |
| 10:10～ 10:50 | 40分 | 大学紹介&自己紹介 ・大学紹介1分+自己紹介30秒×人数 ・大学紹介は、口頭で行う。手持ちのフリップは可。 | 全体 | |
| 11:00～ 11:15 | 15分 | 参加目的の共有 ・5人グループ ・冒頭グループ内での簡単な自己紹介 | グループ | 学生は事前課題内で参加目的を準備し、事前課題を提出したのち参加する。 |
| 11:15～ 11:55 | 40分 | 【説明】「with コロナの社会と働き方」を考える | 全体 | |
| | 30分 | 【GW】「どのような社会になるのか？」 5人グループ | グループ | |
| 13:00～ 13:40 | | 自己紹介動画の作成 | 全体 | |
| 13:45～ 14:25 | | リモートインターンシップでのマナー、意識、態度 | 全体 | |
| 14:30～ 14:40 | 10分 | 参加企業、課題発表（ここで実習企業を発表） | 全体 | |
| 14:40～ 14:50 | 10分 | グループ内自己紹介（ここでグループメンバー初顔合わせ） | グループ | |
| 14:50～ 15:00 | 10分 | 就業実習までの準備・連絡 | 全体 | |
| 15:10～ 15:30 | 20分 | リモート懇親会 ①実習企業単位で学生がわかる | 全体& グループ | 社員は希望があれば参加可 |
| 15:30～ 15:50 | 20分 | ②10人グループに分かれる （異なるグループ同士の学生など、学生をシャッフルする） | グループ | |
| 15:50～ 16:00 | 10分 | クロージング | 全体 | |

出所）CIAC（2020）実習準備資料を参照し筆者作成

2.5 就業実習（9月）

以上のような事前準備・事前研修を経て、9月2日から9月10日の間の任意の3日間で、就業実習が行われた。就業実習は、以下のような形で行われた。表2の通り、企業は、9月2日、3日、7日のいずれかの一日を就業実習初日とすることとされた。この3日のうちのいずれかを各企業の就業実習初日とすることで、同日に開始する実習関係者（企業、学生、教職員）が初日の全体会を合同で行うことが可能となった。

表2 就業実習 全体の流れ

| | | |
|-------|----|---|
| 1日目 | 前半 | <ul style="list-style-type: none"> ・5社程度で集合実習 ・初日は、9月2日、3日、7日の中で実施する ・内容：【社員の語り】仕事、働く、キャリアビジョン10分 ・口頭発表。フリップは使用可。 ・社員（他企業との相互フィードバック含む）、教職員、学生はそれぞれのフィードバックシートに記入する（相互フィードバック） |
| | 後半 | 各企業の実習 【学生Aの実習企業の3日間の実習概要説明】 <ul style="list-style-type: none"> ・映画館での新規ビジネスを考え、グループワークで内容を深め、発表する ・データ分析ツールの説明 ・企業情報、映画の興行収入ランキング等のデータの確認 など |
| 2～3日目 | | 各企業の実習（時間帯、内容、使用ツールは企業による） |

出所）CIAC（2020）実習準備資料を参照し筆者作成

一例をあげると、1日目が9月2日に就業実習初日となった関係者（企業、大学関係者、参加学生）は当日、全員、画面上に集い、CIAC講師のファシリテーションの下で実習初日の内容について確認し、全体の方向性等が確認され、その後プログラムが進められた。具体的な内容として、まず各企業の社員から、「仕事とは」「働くとは」「with コロナのキャリアビジョン」などが学生に向けて語られた。参加した学生、教職員、他企業の社員はそれぞれが気づきをフィードバックシートに記入後 Slack 上に掲載し、全員が各々のフィードバックシートに記載された内容を確認できるようにした。1日目の午後は企業ごとに分かれて1社4～5名の学生が企業に指定された Zoom の画面上に集い、3日間の実習概要やねらいなどについて説明を受けた。1企業に参加した学生は、大学はもとより、学年、性別、専門、地域などが異なる、初対面のメンバーであった⁶。

2日目、3日目は企業ごとに分かれて実習が行われた。表3は、学生Aの参加した企業の実習概要である。一例として示す。事前に担当者から学生に与えられた課題「新規映画館事業の開拓」というテーマについて、2日目の多くの時間を使い個人で企画書作成を行った。個人作業の間、カメラオンを基本とし、定められた時間に休憩をとりながら夕方まで個人作業を行った。2日目の最終時間帯に、参加学生、企業担当者全員が画面上に集合し、学生が企画の進捗状況を発表したのちに企業担当者からのフィードバックを受けた。その内容をもとに企画を洗練させ、3日目は修正案を学生同士ですり合わせ、グループの企画案を作成した。その企画案を夕方プレゼンテーションし、複数の企業担当者および大学教職員が企画内容、作業プロセスについてフィードバックを行った。最後に振り返りを行い、3日間の実習が終了した。

2.6 事後研修（9月）

3日間の実習に続いて、全参加学生の就業実習が終わった9月12日に、学生を対象とした事後研修が行われた。続いて9月15日に社員対象のフォローアップ研修が行われた。学生を対象とした事後研修の流れを表4に示す。

6 連携協働りモートインターンシップでは実習企業への学生の振り分けは事務局によって行われた。大学や性別、専門や地域などに偏りがなくなるように振り分けされた。そのため、自身の専門分野とは異なる企業や遠方の企業での就業実習となった学生もいる。

コロナ禍におけるリモートインターンシップの事例報告

表3 2日目・3日目のある企業の実習の流れ

| 2 日目 | | | |
|-------------|------|---|------|
| 時間 | 分 | 内容 | 形態 |
| 10:00～11:00 | 60分 | 企画書作成 | 個人作業 |
| 11:10～12:00 | 50分 | 企画書作成 | 個人作業 |
| 12:00～13:00 | 60分 | 昼休憩 | 全体 |
| 13:00～17:00 | 240分 | 休憩をはさみながら企画書作成 | 個人作業 |
| 17:00～17:30 | 30分 | 企画書 進捗状況の発表, 一日の振り返り | 一社全体 |
| 3 日目 | | | |
| 時間 | 分 | 内容 | 形態 |
| 10:00～12:00 | 120分 | 企画書すり合わせ | 学生全員 |
| 12:00～13:00 | 60分 | 昼休憩 | |
| 13:00～15:00 | 120分 | 企画書すり合わせ | 学生全員 |
| 15:00～16:30 | 90分 | グループ分企画書 発表 企業の方, 教職員からのフィードバック | グループ |
| 16:30～18:00 | 90分 | 各自の「働くとは」「仕事とは」「with コロナの社会のキャリアビジョン」についての学生の発表 | 一社全体 |
| 18:00～ | 15分 | 就業実習全体の振り返り | 一社全体 |

出所) CIAC (2020) 実習準備資料を参照し筆者作成

表4 事後研修の流れ

| 時間 | 分 | 内容 | 形態 |
|-------------|-----|--|------|
| 9:30～10:00 | 30分 | 学生は15分前にアクセスし, 大学・名前の表示, 画面確認をする | 全体 |
| 10:00～10:10 | 10分 | オープニング 趣旨説明 | 全体 |
| 10:10～10:40 | 30分 | 各グループ内での振り返り ・各社のメンバーでの振り返り | 全体 |
| 10:45～11:15 | 30分 | 「グループ内での振り返り」の共有 ・グループごとに分かれて共有 ・4社で1グループ(全体では4グループ) | グループ |
| 11:15～12:00 | 45分 | 各自の目標達成の振り返り | グループ |
| 13:00～13:40 | 40分 | 「with コロナの社会と働き方」を考える ・自分はどうか生きて, どうか働いていきたいか? | グループ |
| 13:45～14:25 | 40分 | 「リモートでの学び, 仕事, 就活」で大事なことは何か? | グループ |
| 14:30～15:00 | 30分 | 全体まとめ | 全体 |

出所) CIAC (2020) 実習準備資料を参照し筆者作成

まず, 学生はブレイクアウトルーム機能を使用し任意で作成された Zoom 上の小部屋に分けられた。全体の参加学生数は61名であった。開始時間に遅刻する学生はいなかった。学生はグループごとに連携協働リモートインターンシップ全体の振り返りを行った。振り返りには大学

関係者、企業関係者も参加し、フィードバックを行った。振り返りは、メンバーを組み替えて複数回行われた。まず、企業ごとの参加メンバーで振り返りが行われた。続いて「実習目標が達成されたか」「with コロナの働き方とは」「自分はどう生きてどう働きたいのか」などのテーマで、グループを組み替えながら振り返りが行われた。一例を挙げると「グループの活動は何点だったか」「各メンバーが果たした役割は何か」「自分の良さを発揮できたか」「もっとこうすればよかったと思うこと」などについて振り返りを行った（日経キャリア教育キャリアエデュ：2020）。

最後に、CIAC 講師のファシリテーションで全体振り返りとまとめが行われ、5日間の連携協働リモートインターンシップが修了した。図2に実習時のZoom画面の写真を示す。



出所）日経キャリア教育キャリアエデュ（2020）
図2 協働連携リモートインターンシップの最終日画面のスクリーンショット⁷

連携協働リモートインターンシップ終了後、参加学生は図3に示されたような振り返りシートを使って各自の実習についての具体的な振り返りを行い、気づきや学びを言語化していった。記入されたシートはSlackに掲載され、連携協働リモートインターンシップの企業ごとのグループ内で共有された。

3 連携協働リモートインターンシップに関する参加学生・教員の振り返り

本章では、実習後に本学学生3名に行ったインタビューの結果から、学生3名（それぞれ、学生A、学生B、学生Cと称す）の振り返り内容を記述する。参加者は全員2年生で一般企業就職希望者であった。男性1名、女性2名である。実習振り返りコメントを示しながら、学生の実習での気づきや学びについて記述していく。なお学生の発話内に、一部、理解を補うための説明を（ ）で入れた。

まず、3名全員に共通しているのは、当初から特にリモートによるインターンシップに強く興味を持っていたわけではないが、新型コロナウイルス感染拡大によって対面での実習が次々に中止になったり、採用活動が対面からリモートへと移行しつつあるという流れを受けて、今

7 図3の写真は参加者・関係者の了承を得て掲載した。

コロナ禍におけるリモートインターンシップの事例報告

| CIAC リモートインターンシップ 就業実習「気づき・振り返りシート」 | |
|---|--|
| 氏名 | |
| 大学・学部・学科・学年 | |
| 参加登録名 | |
| 【企業から与えられた課題】 | |
| <p>■「気づき・振り返りシート」記入について</p> <p>以下の欄点を整理し、できるだけ具体的に記入してください。記入は、<u>当日に行ってください</u>。</p> <p>【能力・知識・技能】：自分の強みが発揮できた、力が足りなかった点、今後伸ばしたい、大学で学ぶべきこと、新たな自分の発見・・・等</p> <p>【コミュニケーションの観点】：社員・メンバーと十分コミュニケーションが取れていたか、もともと人と関わり・確認すればよかった、社員の指示が分かった、自分の意見を伝えられた・・・等</p> <p>【リモート環境の観点】：通信状況が不安定だった、メモリ不足の経験があった、作業する環境が十分整っていない、PC・デジタルツールが上手に使えなかった・・・等</p> <p>【その他】：上記以外で、気づいた点、感じた点、良かった点、反省すべき点、社員やメンバーから学んだ点・・・等、自由に記入してください。</p> <p>※記入にあたって、枠は必要に応じて拡大してください。</p> | |
| 1 日 目：月 日 時 分～ 時 分 | |
| 取り組みの業務内容 | |
| 1 日目の「気づき・振り返り」 | |
| 1 | |
| 今日の活動の中で、ワクワクした、楽しかったのはどのような場面でしたか？ もしあれば具体的に記述してください。（上記の「気づき・振り返り」に重複しても構いません） | |
| 今日の活動の中で、驚いた、戸惑った、思っていたとは異なるような場面でしたか？ もしあれば具体的に記述してください。（上記の「気づき・振り返り」に重複しても構いません） | |
| 2 日 目：月 日 時 分～ 時 分 | |
| 取り組みの業務内容 | |
| 2 日目の「気づき・振り返り」 | |
| 今日の活動の中で、ワクワクした、楽しかったのはどのような場面でしたか？ もしあれば具体的に記述してください。（上記の「気づき・振り返り」に重複しても構いません） | |
| 今日の活動の中で、驚いた、戸惑った、思っていたとは異なるような場面でしたか？ もしあれば具体的に記述してください。（上記の「気づき・振り返り」に重複しても構いません） | |

出所）CIAC 実習準備資料より一部抜粋
図3 連携協働リモートインターンシップ用振り返りシート（部分抜粋）

回の連携協働リモートインターンシップへの参加を決めたという経緯である。また学生 ABC とも、パソコン操作等がそれほど得意ではないため、実際にリモートでのインターンシップを体験することによって苦手が克服できるのではないかと考えたということである。当初全員が Zoom も Slack も知らない、使えないという状態であったが、事前研修を積むうちに「なんとなく」使えるようになり、実習では企業担当者や同じグループの仲間と全てリモートでコミュニケーションをとることができていた。実習は、パソコンと iPad を併用しながらの Zoom、Slack、メールを使用した形であったが、5 日間、連絡が途絶えたりミスコミュニケーションが起こったりすることなく、実習を終えることができた。

今後の学生たちの就職活動は、対面形式と非対面形式が併存することが予想されている。本学学生は通常の大学の授業で使用されているマイクロソフト社の Teams によるオンラインコミュニケーションには比較的慣れているものの、それ以外の上記のようなツールを学内活動で使う機会は限られている。学生たちが「自分はパソコン操作が得意ではないので、はじめは（Zoom や Slack などが）自分に使えるのかと心配だった（学生 B）」と述べるように、これらのツールに慣れ親しんでおくことは、ツール使用に対する不安を緩和する実践的な効果がある。就職活動を先取りした活動としては実践的に有益であろう。同時にツールの使い方だけでなく非対面での画面上コミュニケーションの特徴についても「リアクションを大きくしないと相手に伝わらないことがわかった（学生 C）」「シーンとなると余計に話しにくいので、まず率先して声をかけるようにした（学生 A）」などの気づきがあった。同時に「最初シーンとなるとあとのグループワークがやりにくいので、（今まではそうではなかったけれど）自分から積極的に話すようにした（学生 A）」「いつも声が小さいと言われて、マイクとの距離が遠いことや近づい

て話す必要があることがわかった。近づいて話し笑顔を心掛けて、スマイルリーダーと言われるようになった（学生B）」に示されるような気づきから、画面上でのコミュニケーションスキルに関する行動変容も認められた。リモートインターンシップは学生がこのような実践的な学びを行うよい機会となった。大学内でのグループワークのみでは得られないコメントであった。

以上の通り、学生からはメリットについて多く語られたが、一方でリモートインターンシップならではの課題についても、以下の通り示された。「担当以外の社員の方とほとんどやりとりができない」「会社の雰囲気や実際に社員の方が働いている様子を見ることができない」「すぐそばに実習生や社員がいないため、ちょっと確認したいことがあったときなどすぐには聞けない」「座っているので腰が痛い」「パソコンの画面を見続けるので目が痛くなる」「一度Wi-Fiが不安定になってあせった」（学生ABC）などである。これらは、昨今一般的な在宅勤務（リモートワーク）においても課題として示されることが多い点である。このように考えると、今後社会に出た際に体験する可能性のある在宅勤務という新しい働き方の一部を実際に体験し、良い点もそうでない点も体験でき、必要に応じてより快適な状況、望ましい状態に改善できたという点において、むしろ学生の将来の就職活動にとって、メリットであったとも考えられる。

また、連携協働リモートインターンシップを教員の巡視という点から見ると、複数同時進行で行われている実習の様子を一日に複数観察できることはメリットであった。通常の実習巡回であれば企業間の移動距離が長いため、現地に滞在し実習風景をじっくり観察することは容易ではない。リモートインターンシップならではの利点であったと言える。

4 事後の学内キャリア教育への影響

以上のように夏期休暇中に参加した連携協働リモートインターンシップは多くの気づきや学びを学生、教員にもたらした。気づきや学び、派生的な影響はインターンシップに関する限られた範囲にとどまらなかった。

たとえば、就業実習で実習先となり実習参加させていただいた東京の企業人事担当者との情報交換を行う中で、本学キャリア教育授業への登壇が決定し、オンラインでゲストスピーカーとして授業登壇していただいたことがあげられる。企業の担当者から企業の情報を一方的に語る形式ではなく、企業人事担当者側およびインターンシップ参加学生の双方の視点から、授業の受講者である1年生に対し、「リモートインターンシップとは」「働くとは」等についての話を聞くことができ、授業を受講する1年生にとっても有益な活動へと発展した。

リモートインターンシップの開催当初のねらいの一つとしてCIACが掲げた「これまで接することがなかった企業との接点ができる」というねらいが具現化したと言えるであろう。2019年度以降の男女共学化によって、本学にも男子学生が増えてきている。広島企業のなかから、広島企業の人事担当者に登壇いただくことが多かった本授業に、首都圏からゲストスピーカーを招くことができたことは、特に男子学生が増え多様性が増した状況において、ゲストスピーカーの多様性も確保できるという点においては、メリットであり、学生が視野を広げて将来の選択肢を検討するためのリソースが増えた状態と言えるであろう。非対面で行われる授業であったからこそ、遠方の企業関係者を授業に招くことができたことは特筆すべきことであろう。非対面授業による「空間の超越」が可能になったことを学生も教員も体験的に理解し、この状況を活用できることに気づけたことは、今回の連携協働インターンシップの副産物と言えるであろう。

5 まとめと今後の課題

本稿では、2020年夏期休暇中に開催された、連携協働リモートインターンシップへの参加概要について詳述した。参加によって明らかになったこととして、まず、リモートインターンシップの運営および参加は、対面で行われるインターンシップ以上に手がかかるということである(CIAC：2020)。準備の段階においては、教員も企業も学生も初めての取り組みであり、短期間で、手探り状態で準備を進めなければならなかった。リモートインターンシップ特有のリモートならではの準備を行う必要があることを、準備段階からしっかりと理解し企画あるいは準備を行う必要があることが明らかになった。

準備が大変なリモートインターンシップであったが、一方で、リモートインターンシップでもここまでできるということも示された。正課の教育課程として行うインターンシップに必要な要素として、文部科学省(2017)では、①就業体験を伴うこと、②授業科目であること、③適切な学生指導の時間が設けられていること、④教育的効果を測定するしくみが整備されていること、⑤原則として5日間以上であること(事前事後学習を合わせて5日間以上なども含まれる)、⑥大学と企業が協働して実践するものであること、などが示されている。また、ここに述べられている就業体験とは、「仕事の実際を知ることや職業観の育成等のため、企業における業務に従事、課題の解決等を体験すること」と広く捉えられている。連携協働リモートインターンシップで行われた就業実習では、企業における業務には従事することはできなかったが、課題解決のプロジェクトにグループで携わっており、企業の担当者からフィードバックを得ている。連携協働リモートインターンシップは、文部科学省(2017)で示された成果の教育課程として行うインターンシップの要件を満たしていると言えるであろう。

連携協働リモートインターンシップでは、企画時に示された大学に対するねらい、学生に対するねらいはいずれも達成されていると思われる。学生たちはリモートワークという働き方を体験的に理解することができた。他大学の学生と接することで気づいた自分の強みや改善点についても実習中、実習後の振り返りシートで振り返ることができていた。所属大学では得られないような企業・業種での働き方に触れることで、視野を広げることができたと言える。大学としても、学生に学びの機会を与えることができ、今後の新たなプログラム構築に関するヒントを得ることができた。これまで接点のなかった企業や他大学とも接点を持つことができた。以上から、当初設定されたねらいは、達成されたと考えられる。

大学生という時期は、キャリア発達段階から見ると「探索段階」に位置づけられる(日本キャリア教育学会編：2020)。職業そのものについても働き方についても、暫定的に選択し準備したものを現実吟味し、自分自身にとっての仕事の意味、働くことの意味を考える時期であろう。そのためには、コロナ禍であっても学生の学びを止めてはいけない。制約のある状況においても、選択できる方法を模索し、学生の学びに資することができるよう、大学は準備を行う必要がある。連携協働リモートインターンシップは、そのための一つの方法として、学生に学びの場を提供できたのではないだろうか。

売り手市場と言われた昨年までの状況が一転していることなど、コロナ禍で学生たちは自分の将来に不安を感じている。学生からは、一体どのような対策・対応をとればよいかわからない、という声が聞かれる。不確実性の高い社会情勢においては、予期せぬ事態も起きやすい。不安であることは受け止めつつも、大学教職員は学生の学びや気づきを促進できるよう、具体的な対応をとることが求められる。

その一例として、リモートでのインターンシップは非対面で企画されているため、中止にな

りにくく、感染のリスクもない。また、今後の就職活動では非対面での面接等も増えることが予想されているため、機会を作って積極的にリモート形式のインターンシップに挑戦してみることで、苦手意識を克服し、多様な採用面接形式にも対応できる可能性があるのではないだろうか。今できる学びを、今できる形で行うための一つの方法が、リモートインターンシップであると言える。

今後は、今回の連携協働リモートインターンシップの経験を生かして、本学独自のプログラムを構築することなどを検討していきたい。併せて、今後リモートインターンシップを行いたいという近隣の企業に対し、今回得られた知見を活かしてプログラムを検討するための材料を提供することで共に新しいリモートインターンシップを作っていくこと、それに参加する学生の準備を進めること、学生の学びに資するプログラムを構築することなどを今後の課題としたい。

謝 辞

最後になりましたが、連携協働リモートインターンシップはもとより、専門人材研修当時からインターンシップに関するご指導をいただきました CIAC 講師の松高先生、西條先生、川島先生、および事務局の方々をはじめとする関係者の皆様、実践を進めるにあたりご協力くださいました企業関係者および他大学教職員の方、参加学生の皆様などすべての関係者にお礼申し上げます。

【引用文献】

- 一般社団法人産学協働人材育成コンソーシアム（2020）「2020リモートインターンシップ振り返り研修資料」（振り返り研修資料）
小原寿美（2018）「広島文教女子大学における短期インターンシップの実践と検証：仮説検証型インターンシップの試み」『高等教育研究』4号，pp. 1-18.
小原寿美（2020）「広島文教大学におけるインターンシップの検討——3年間の振り返りと新規プログラムの構築——」『広島文教大学紀要』55号，pp. 35-47.
日本キャリア教育学会編（2020）『新版 キャリア教育概説』東洋館出版社
松高 政（2020）『大学教育を変える，未来を拓くインターンシップ』ジアース教育新社

【引用 URL】

- 内閣府（2020）「学生の就職・採用活動開始時期等に関する調査結果（速報版）について（概要）」siryou2.pdf (cas.go.jp)（2021年2月4日 閲覧）
日経キャリア教育キャリアエデュ（2020）「挑戦！リモートインターン（上）17大学61人学生が Zoom で参加インターンシップの行く先」（2021年2月1日 閲覧）
<https://career-edu.nikkeihr.co.jp/category01/remotointernship.html>
文部科学省（2017）「インターンシップのさらなる充実に向けて 議論のとりまとめ」（2021年2月1日 閲覧）
文部科学省（2018）「大学等におけるインターンシップの推進に係る専門人材の育成・配置について」（2021年2月1日 閲覧）
https://www.mext.go.jp/b_menu/internship/_icsFiles/afieldfile/2018/05/31/1405622_2_1.pdf

—2021年2月5日 受理—